

午餐

「できたわよ」

キッチンテーブルの上にはいつものようにスーパーのタイムサービスで買って白いトレイから皿に移しただけの総菜が並んでいる。その皿もコンビニやドーナツ屋のポイントで引き替えてきたものだ。

だが今夜は少し違っていた。確かにそうした味付けの濃そうなくたびれた総菜達の真ん中、テーブルの中央にどこにあったのか、見たこともないような大皿がおかれ、湯気の立つような天ぷらが山盛りになっていたのだ。

「スーパーの前で珍しく魚屋さんが販売していたね。安かったし、料理の仕方まで教えて貰っちゃったのよ、この烏賊の足」

みれば確かにイカの、それもゲソばかりの天ぷらだった。しかし、いくら俺がいかにげそが好きと叫びたって。

「烏賊の足好きだったでしょ？ 多すぎた？」

いや、と口の中で呟いて、箸でそのてっぺんにのっている半分衣がはげかけているのをつまんで、あれっ、今、足の先がくるりと。

「ほんと、新鮮だからかしら、おいしいわよ」

妻のつまみ食いの告白を聞きながら、油で揚げられて良い色艶になっている先細の二三本ついたイカゲソを軽く天つゆにつけただけで口に運ぶ。箸の間で何かびくんとしたような。それでもとにかく好物だから。

ツルン、と。

まるで縛から放たれるのを待っていたように、足達はみずからが歯の間でバラバラになると、先を急ぐかのように喉を下っていった。

「隣の奥さんも、ウツ」妻が下腹部を押さえて椅子から転げ落ちる。家の外から悲鳴のような叫び声が響き渡る。

その声につられるように窓の外に目をやると、せわしなく揺らめく大きな影が外灯の下を横切ってゆく。いくつもの悲鳴が。

くぐもったような妙な音がする。それが、俺の下腹部から鳴っていると分かった時、Tシャツに赤い点が現れていた。